

【書評】

M・S・M スコット著

『苦しみと悪を神学する — 神義論入門』

加納和寛訳

須藤英幸

完全に善である全能の神が世界を創造したのなら、なぜ私たちは現実の生活の中で様々な苦しみを経験しなければならないのか。換言すれば、なぜ神は世界において悪の存在を許しているのか。このような矛盾を理論的に解き明かそうとする学的試みが、「神義論 (theodicy)」と呼ばれる。原著の著者によれば、悪の問題は歴史的にはまずアウグスティヌスによって哲学的方法において展開され、中世から近世にかけても、アウグスティヌスの方法的枠内で議論されてきた。海外では、現代神学が多様に展開するに従って、神義論の可能性も様々な形で提案されるようになったが、日本語で読めるようなものとして積極的に紹介されてこなかったこともあり、神義論をめぐる本邦の神学的な知的探究は停滞状態にあるといえる。このような知的な閉塞状態にあって、神義論を歴史的視点から包括的に扱った本書が出版され、日本語で読めるようになったことは、生活の中で直面している様々な苦しみや悪の問題に何の意味も見いだせないまま呻吟しているすべてのキリスト者にとって吉報であるに違いない。さらに、キリスト者一人一人が苦しみや悪の問題に適切に向き合うことができるように助言することも教会教役者の責任であることを考慮すれば、牧会に携わるすべての人々に是非読んでいただきたい著作である。本邦の神学的領域において欠落していた神義論の基本的知識を合理的に提供してくれるという点で、本書は画期的な翻訳書と言える。

原著 *Pathways in Theodicy: An Introduction to the Problem of Evil* (直訳すれば『神義論における幾つかの道筋 — 悪の問題についての序論』) は、カナダの

トーンロー大学宗教学部准教授の Mark S. M. Scott (マーク・S・M・スコット) によって Fortress Press から 2015 年に出版された秀作であり、関西学院大学神学部准教授の加納和寛氏が翻訳に取り組み、『苦しみと悪を神学する—神義論入門』として教文館から 2020 年に出版された。スコットには、本書の他にオリゲネスの悪の問題を扱った *Journey Back to God: Origen on the Problem of Evil* (New York: Oxford University Press, 2012) という著作もあり、歴史神学的な視点から現代の悪の問題を分析する視点を備えている。「訳者あとがき」によれば、加納氏が講義の教科書として使用するために「基本的なことから神義論をわかりやすく解説している本」を探していたところ出会ったのが本書であるとのことだ。訳文が読みやすいうえ、巻末には訳者による「用語解説」も付されており、神義論の教科書としても申し分のない内容になっている。

本書でスコットが試みていることは、苦しみや悪の問題についての議論に一定の結論を出すことではなく、建設的な議論の端緒が開かれるような、複眼的な神学的土台を提供することである。この目的を達成するために、スコットは神義論をめぐる六つの道筋を提示して、各道筋について長所と短所を説明する。道筋の前半部分で、神義論として形成されたと認められる議論、すなわち、「自由意志による擁護論」(第三章)、「ソウル・メイキング神義論」(第四章)、「プロセス神義論」(第五章)が扱われ、そのうえで後半では、これまでに展開された神学的議論を応用することによって神義論として形成可能と思われる議論、すなわち、「十字架の神義論」(第六章)、「反神義論」(第七章)、「神義論を乗り越える」(第八章)が説得的に展開されており、悪の問題をめぐる議論が複眼的視点から広げられている。スコットは神義論の各道筋に影響を与えた哲学者や神学者を提示しつつ客観的で公平な説明を重ねており、読者は慎重に読み進めることによって各道筋についての歴史的展開とその内実を合理的に把握することができる。

本書が卓越している点は、第三章から第八章において神義論をめぐる六つの道筋が分かりやすく紹介されていることだけではなく、「はじめに」

から第二章において独創的に論じられる神義論の方向づけが与えられていることでもある。強いて本書の欠点を挙げるとすれば、神義論の方法論をめぐる議論においてスコットが考えている企画の全体像が把握しにくいことであろう。したがって、これから本書を手にする読者の一助になろうことも考慮して、本書評では特にこの神義論の方向づけを中心に解説してみたい。「はじめに」において、スコットはアクィナスが『神学大全』で提示している無神論者の論拠を紹介する。前提として、一方の反対物が無限であれば、他方の反対物は完全に消滅することが挙げられる。もし完全に善なる神が存在すれば、いかなる悪も見いだされるはずがない。しかるに世界には悪が見いだされる。ゆえに、神は存在しない。この論拠に対して、アクィナスは神存在の証明を試みるわけであるが、同時に、アウグスティヌスと共に、神は悪の存在から善を引き出すことができる点に神の無限の善性を見ている。それゆえ、悪の存在が直接的に神の存在を否定することにはならないにしても、「なぜ善なる神は悪を許しているのか？」という神学的な問いは残されたままであることになる。このように、悪の問題は、神が善であることと、悪が存在することやその結果として苦しみが存在することとの「論理上の緊張」として捉えられるのである。

神義論に関するスコットの確固とした立場は、神義論とは解答を探すことではなく、悪の問題に応答できるような神学的な素材を探すことにその方法がある、ということである。この点から、キリスト教神学が軽率にもこれまで繰り返してきたように神義論を非生産的で解答不能なものとして退けてしまうことは、悪の問題について語りうる材料を所持しないことになってしまい、その態度は危険でさえある。キリスト教神学において懲罰的神義論が無批判的に受容されてきた歴史はこの態度の結果でもあろう。懲罰的神義論とは、罪と苦しみとの、あるいは、義と祝福との直接的な関係性を強調しつつ、神が罪を罰するために苦しみを利用すると考える立場である。確かにこの立場には直接的な聖書根拠が存在するが、スコットによれば、盲人として生まれたことが罪の結果でないことをイエスが宣言したこと（ヨハネ 9:1-3）や、イエスが因果応報を否定したこと（ル

カ 13:4) などの証言によって、すべての苦しみが罪の結果であると考え
立場は明らかな間違いとなる。このように、懲罰の神義論とは、多様な悪
の議論のうちから狭い視野によって選ばれた一つの議論にすぎず、特に神
の憐れみと恵みから切り離されて説明される場合は破壊的な結果をもた
らすことになりかねないことが主張される。

第一章の「悪を考え直す」では、悪の問題が歴史神学的な視点から包括
的に論じられている。スコットによれば、キリスト教の歴史の早い段階で、
悪の問題が神秘的道徳的領域から哲学的領域に移された結果、聖書的な悪
の視点が置き去りにされてしまった。したがって、現代キリスト教の神義
論に要請されることは、伝統的な哲学的視点を批判的に継承しながら、哲
学的本質論から聖書的根拠や経験的悪に根ざした神学的考察に移行すべ
きことであり、同時に、複数の神学的素材を提示して対話的なアプローチ
を促すことである。この目標に向けて神学的土台を与えるために、第一に、
聖書における悪の具体的内容が「混沌としての悪」「罪としての悪」「サタ
ン的な悪」「苦しみとしての悪」という四つの視点から吟味される。聖書
においては、苦しみの原因が罪だけに關係しているのではなく、混沌やサ
タンなどのいわば自然の破壊力にも關係しており、しかも、それらが様々
な方法で聖書に織り込まれていることが主張される。しかも、聖書におけ
る悪の問題は、宇宙的、道徳的、靈的な次元で扱われており、後に展開さ
れる神義論の合理的、抽象的、哲学的な地平とは表現の方法が異なってい
るのである。

第二に、悪の問題が哲学的領域に移されてからの神義論の歴史的展開
が、アウグスティヌス、トマス・アキナス、ジャン・カルヴァン、カー
ル・バルトの神義論を通して把握されることが試みられる。具体的にいえ
ば、神義論の哲学的アプローチは、混沌、罪、サタン、苦しみなどの聖書
的表現に代えて、「善の欠如 (*privatio boni*)」という合理的概念を用いて悪
の問題を考える方法である。このアプローチの本格的な展開はアウグス
ティヌスに始まる。善の神と悪の神との闘争の場として世界を考えたマニ
教の二元論的世界観からキリスト教への回心過程において、一者からの流

出として世界を考えた新プラトン主義の一元論的世界観がアウグスティヌスの霊的な目を開いた。その結果、完全に善なる全能の神に対するアウグスティヌスの信仰を妨げていた、世界における悪の問題が解決されることになる。悪は意志の歪みや倒錯に起因する善の欠如と定義され、したがって、独立した実在としてではなく、善いものとしての神の被造世界に寄生する存在として、いわば非存在として考えられるようになった。このようにして、概念的には、神が悪の創造者とは考えられなくなったのである。アクィナスが新たにアリストテレスの視点を加え、カルヴァンは神の計画（摂理）の視点を加えて考えているものの、彼らの神義論は基本的にアウグスティヌスのそれを超えるものではない。バルトもまた虚無的なものとして悪を捉えており、アウグスティヌスからバルトへと続く神義論は、「善の欠如」として概念化された悪を考える方法である。

これに対して、スコットは悪が体験的に実在することを表明すべきだという立場に立って、伝統的な悪の欠如理論における弱点を指摘する。悪の欠如理論の立場では、第一に、悪が存在するし存在しないと考えられる点で矛盾に陥ること、第二に、悪の起源が説明困難であること、第三に、体験的な悪の実在性が弱められてしまうこと。それにもかかわらず、スコットによれば、伝統的な悪の欠如理論は神と悪との性質の対称性をうまく表現しており、それ自体は否定されるべきものではない。スコットの試みは、聖書的根拠や経験的悪に根ざした悪の定義を深めることによって、悪の問題に応答できるような神学的な素材を提示することであり、それを通して、伝統的な悪の欠如理論の弱点を克服することである。

第二章の「神義論を定義し直す」では、神義論が現代的批判を通して再考されている。「神義論」という用語の概念は、「現実の生活とは何の関係もないもの」と誤解される傾向にあるのだが、確かに、専門的にいえば、神義論とは神の性質と悪の実在とを調和させる「論理上の挑戦」である。しかし、スコットによれば、神義論の試みは、神の被造世界において「苦しみには何の意味があるのか？」を問うものであり、その使命は生活のどこにでも起こりうる悪、不正義、不幸という現実を理解し、それに順応す

ることによって、苦痛を和らげることにある。したがって、神義論は第一に神学に属するものであり、長年にわたり哲学に任せっきりであった神義論の問いを、神学独自の的方法論と理論とを用いて再構築する必要がある。

悪の理論上の問題は、「トリレンマ」として、すなわち次の三つの事柄が同時に成立することのない背反として表現できる。すなわち、①神は完全な善である。②神は全能である。③世界に悪が存在する。伝統的な神義論は、知的脅威から神への信仰を守る企てでもあるのだが、現代的批判は特にそれが経験的な苦しみに耳を傾けていないことに厳しく向けられている。すなわち、スコットによれば、伝統的な神義論は「苦しみという人間経験へのまなざしを失ってしまっている」。したがって、実存的問題として苦しみに応答できるような神学的な素材を提示できるように、「創造的、多角的、経験的な根拠に基づいて、多様な悪の問題を分析する」ことによって神義論を再構築すべきことが主張されている。このようにして、スコットは「神学的であることが明らかな枠組みの中で、哲学的な神義論の方法と具体的な経験に基づく神義論とを統合すること」を企画し、この方法論に基づいて、第三章から第八章まで、様々な悪の問題に応答している六つの道筋を、複眼的な神学的土台として提示することになる。

第三章から第八章までを読み進めていけば、読者は悪の問題に応答できるような様々な神学的な素材を手にすることができる。その結果、読者は、神学的な多様な素材を土台にして、苦しみの意味に対しても複眼的な視点をもつことができるようになるだろう。同時に、聖書の解釈においても、神、世界、苦しみの関係性が創造的に捉えられて、合理的でありながらも苦痛の和らぎに至るような釈義が生まれてくる可能性もある。このように、新しい視点と可能性が与えられる点から、苦しみや悪の問題に悩むすべてのキリスト者だけでなく、牧会に関わるすべての方々にも本書を強く推薦したい。

(教文館、2020年、364頁、ISBN: 978-4764267442、定価 3,600円+税)